

4月の安全・衛生・防災の管理・活動

職場のコミュニケーションを高め、労働安全衛生を進めよう



4月は事業場や職場の安全・衛生・防災の管理・活動にとって重要な月です。

職場では協力会社等を含めて、人事異動や組織等の変更、新入・転入者の配置、作業システムの変更などで人心への負荷が高まります。そのため職場内外の情報共有や調整、ミーティングやKY、報告・連絡・相談が重要です。

▼新年度にあたり労働安全衛生に関する年度方針や、その重点課題、またシステム変更で更新した作業手順等を従業員全員で確認します。

▼4月は関係会社・業者を含めて、新入・転入者が配属されてきます。「職場の規定や作業手順を守る」「分からないことは必ず聞く」「少しの異常も上司等に報告する」ことを関係会社の従業員を含めて職場の全員で徹底し、守るよう習慣づけることが大切です。

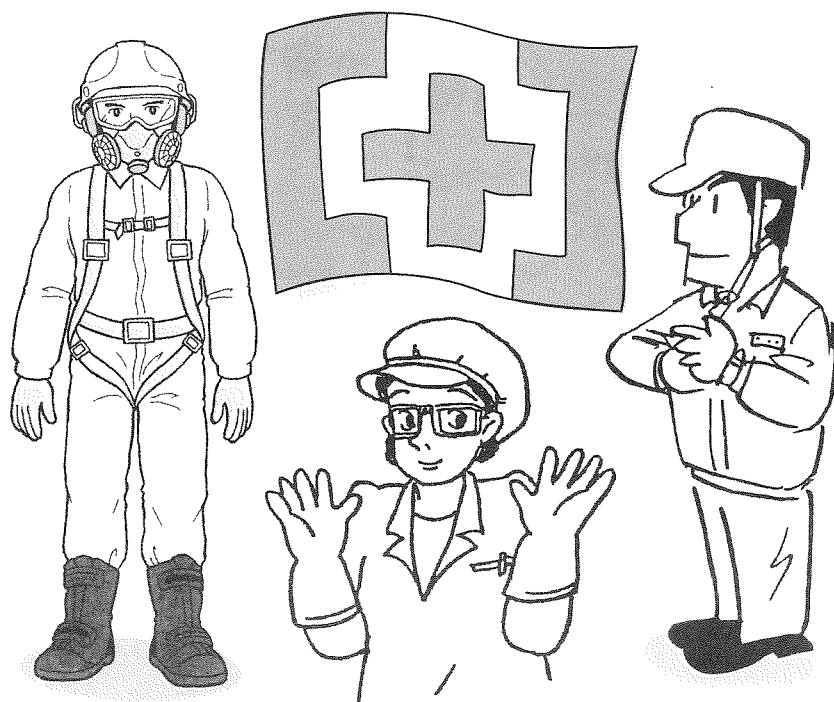
▼4月末からの連休の前・中・後は、定期点検や修理、立ち上げ作業などの「非常作業」で思わぬ事故や災害の発生リスクが高まります。連休前には連休後の立ち上げ作業についての段取り、リスクアセスメント、4S(整理・整頓・清掃・清潔)を実施します。

そして立ち上げ作業の事前準備を協力会社等を含めた関係者と行います。

▼新入・転入者の作業の習熟度をOJT計画に基づき確認し、進捗状況に応じて(必要であればスケジュール変更も)援助・支援をします。また、生活等の変化に伴う不安の解消への援助も大切です。

4月 まず服装・保護具をバッチリと

— 服装で分かる その職場の安全衛生水準 —



私たちが着用している作業衣は、職場の危険や有害な環境から身を守るためという役割と、見栄えがよく作業がしやすいという面から選定されています。

保護衣や安全帯(墜落制止用器具)などの保護具は、着用者にとって厄介なものかもしれませんが

んが、しかし、危険・有害なものから直接的に着用者の身を守る砦(とりで)になるものです。

作業服や保護具をきちんと着用することは、事業場や職場の連帯感を生み出す安全衛生作業のシンボルでもあります。次の事項等について再チェックしてみましょう。

- ① 作業服に破れやほころび、ボタンのちぎれはないか。
 - ② 油や薬品で汚れてないか。
 - ③ ポケットに尖った物や、不必要な物が入っていないか。
 - ④ 帽子は、決められた正しいものを正しくかぶっているか。
 - ⑤ 服や帽子の名前、表示等は明瞭になっているか。
 - ⑥ 履物は足によくフィットしているか。破れや汚れはないか。すべりやすくないか。
 - ⑦ 保護衣や保護具は、規定のものを正しく使用・着用できるように点検しているか。
- 新年度の始まりの4月、まず服装をきちんとしてスタートしましょう。

「不安全行動」による災害を無くそう

……まず、設備や環境の安全化を……



職場の労働災害のほとんどは、職場の設備や環境の「不安全な状態」と、そこで働く人の不注意などによる「不安全な行動」が重なって発生しています。

不安全な行動としては近道して立入禁止箇所を通り抜けた、機械を止めずに修理・清掃をした、安全帯を着用しないで高所作業を行ったなどの

不安全行動によって、取り返しのつかない災害が発生しています。

1 全員が参加して作業手順や安全衛生規定の見直しを定期的に行い、全員が守る安全な作業手順等に改善していく。

2 不安全行動に対して誰もが黙認しないですの場で注意し合う職場にする。

3 不安全行動を未然に防ぐための設備や機械の改善を進める。

例①通路や階段を安全な状態に維持する。

②危険エリアへの進入を囲い等で防ぐ。

③機械の刃部や回転部にはカバーを。

④標識の位置や文字を見やすくする、など。

4 決められた作業服と保護具を正しく着用する習慣を皆で守る。

5 作業の要所で指差し呼称を積極的に行う。

※人の注意力には波があり、信頼性が低下することがあります。したがって、安全対策で大切なことは、設備や環境の安全化をまず考え実行することです。

新たな気持ちで「ヒヤリ事故運動」を

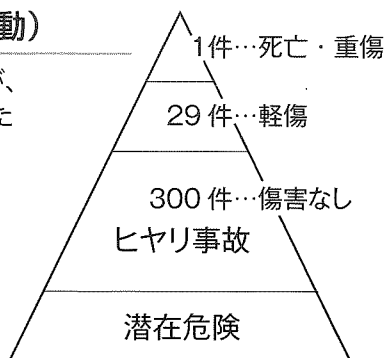
— 1月2日 羽田飛行場の航空機事故の教訓 —

300運動（ヒヤリ・ハット運動）

アメリカの安全技師ハインリッヒが、同じ原因の事故 55,000 件を調査した結果、下記のこと分かった。

死亡・重傷者……0.3%
軽傷者……8.8%
傷害なし事故……90.9%

この割合が1 : 29 : 300
…300 を無くせばケガも少なくなる



▼本年1月2日夕刻、前日の能登半島地震の救
援物資を積んで羽田空港を飛び立とうとしてい
た海上保安庁の飛行機に、着陸してきた旅客機
が突っ込んで来て大破・炎上し、海保機の5名
が亡くなる事故が発生しました。
原因は海保機と管制との間の指示・通報・連
絡・確認が徹底されなかったとされています。

このような通報等の不徹底による「ヒヤリ事
故」は過去にも多くの飛行場で発生しており、
運良く事故に至らなかったといえます。

▼工事や建設現場等で繰り返し返されている事故や
災害のほとんどは、これまでの「ヒヤリ事故」が
報告されず、問題にされずに安全対策が実施さ
れなかった結果といっても過言ではありません。

「ヒヤリ事故」をオープンにすると「自分や同
僚の欠陥をさらけ出すことになる」とか「報告
書に書いたり、調査をしたり、余計な仕事が増
える」などの理由で「ヒヤリ事故」の報告が出
にくい事情もあるようです。

▼ヒヤリ事故は現に発生した「事故」です。

たまたま私たちがケガをしなかっただけなの
です。このヒヤリ事故例を貴重な教訓として、
直ちにオープンにして対策を実施し、他職場に
も水平展開して全事業所の事故や災害防止対策
に役立てることが何より重要なことです。

▼「ヒヤリ・ハット運動」や「300運動」等の
KY活動が停滞気味といえます。新年度の4月、
新たな気持ちで展開していきましょう。